

清流の息吹を訪ねて

初秋のアユ(中編)

このコーナーは、市内山ノ内で釣りに関するアドバイスなどを行う(株)フィッシュナビの代表で、「魚の専門家」の八鳥洋二さんからご寄稿いただいています。

今年の夏もあまりの猛暑で、本当に秋なんてくるのかと暦を疑いたくなるほどだった。しかし、あれだけの猛暑であっても、立秋(8月7日)

を過ぎると空は秋になっているし、秋分(9月23日)となれば、夏の名残よりも秋の便りの方が多くなっている。まして彼岸花なんてこの時期にドンピシャなタイミングで出てくる…。この暦の教えは、長い歴史で培った知恵の賜物であり、よくも先



穏やかに食事する初秋のアユたち

人はこの法則を導き出したものだと感心してしまいます。

さて、今回は久しぶりにアユの話に戻りたいと思います。あの盛夏の神戸川を賑わせていたアユたちはというと…、まだここにあります。しかし、かつての賑やかさもなければ、苔岩を巡る縄張り争いもありません。川のいたるところで小さな群れをつくり、動きも緩やかに思えます。この光景は、夏も終わり9月を過ぎる頃によく見られ、あと1カ月もすれば、体は成熟し産卵のため川を下る準備をしましょう。

因みに、日本の伝統漁法の1つで、竹を組んだ築で獲るアユ漁も、川を下る性質を利用したもの。これも夏の終わりの風物詩といったところででしょうか。これからは、秋が深まるにつれて、刻々と変化するアユの様子をお伝えしたいと思います。